
IS fusion

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S f u s i o n

【Nコード】

N 6 6 7 9 Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

タイトル通り、本編とオリジナルの融合。オリ主 久遠祐希が加わったISの世界・・・彼女もまたある意味の天才だった。IS学園に入学し波乱万丈の物語が始まる！

なおこの作品えらく頻繁に他作品を引用します。その都度助言しますがご理解を。

設定・注意（前書き）

テスト前だが気にしない。

というよりは気にもしない。

テストは金曜日

設定・注意

こんばんわ。今から投稿していくのはIS＜インフィニット・スト
ラトス＞を元にしたオリ主を加えた小説です。小説自体初めて書く
ので多目に見てくだされば有り難いです。なお、文中のキャラや機
体、世界設定について自分が愛読しているお気に入り小説を参考・
・もとい引用させていただきます。その際は前書き、後書きで備考
として入れていきます。

そんなこんなで始めたいと思いますのでよろしくお願いします。

あ、あと自分は高1ですのでテスト等で不安定となります・・・
それでも読んでくだされば光栄です。

目標は、

「自分のお気に入り小説の融合」です。

それでは次回からよろしくお願いします。

一話 興味の対象（前書き）

勉強するやる気がない

テストはできないひとがすればいいといつも思う

一話 興味の対象

私は今歩いている。

何処へって？

友人の家にです。私の最初の友達、篠ノ之箒と遊ぶ約束をして今向かっている。

私は毎回おもうのだけど、箒の姉さん、束さんはいつも無表情・冷酷……

今となつてはあまり気にしなくなつたけど、それがただ単に興味の対象じゃないからだそうだ。

それはさておき到着！呼び鈴ならして少し待つ。そして、

「祐希早かったな、あがつていいよっ！」

箒ちゃん登場！！

「うん！ありがとっ！お邪魔します。」

私は久遠祐希^{ひさとみ ゆうき}8歳。小2。

まあ、自己紹介はおいといて、靴を脱いで上がる。

2階に向かっていると色々とプリントを持った束さん登場。

多分今日も同じなんだろうなあと思いつつ、

「こんにちはっ」

と挨拶すれば

「……………こんにちは。」

やっぱりそつかあ。変わらないや。

束さんの腕から一枚抜けて落ちた。

祐希はそれを拾い渡そうとしたが……

その内容を見て全てが分かってしまった。

そして、

「この図は何かのグラフ…？ネットワークのような…。でも所どころによって途切れている…。自己進化の過程？」

周りからみればただのグラフ…その証拠に簞は頭の上に？を浮かべている。

だが、そのつぶやきに束は見逃さなかった。

「…！？…君、分かるの？」

「えっ、…まあ、なんとなく？なんかひらめいたから、つい」

束さんの気迫に押された！

祐希に軽いダメージ？

「じゃあじゃあ、これはどうかなっ？」

束さんの気迫上昇中？

「これは、言語認識プログラムが神経接続？その先は…脳？さっきのネットワークのようなものの通信かな？」

「凄いよ君、君も天才だあ？ 君の名前はっ！」

束さんは以前の無関心な対応が一変した。
当然その対応ができる訳なく、

「ゆ、祐希。久遠祐希です…。」

少し噛んでしまった。

「祐希ちゃんかぁ…うん！ゆーちゃんに決定！いつでも来ていいよっ。」

愛称が決まった！興味の対象となった瞬間だった。

「姉さん、…祐希いつも遊びに来てるけど。」

「えっ、そーなの。まあ、いつか」

「「はぁーっ…」」

落胆する筈と祐希だった。

まだこの時2人はこのさきの未来が予想できなかった。

一話 興味の対象（後書き）

今回は和利夫さんのを引用しました。

オリ主と東さんを結ぶのはこれしかないと思いました。

ここから数話は和利夫さんのを引用していききたいと思います。

二話 助手依頼（前書き）

テスト前なのに執筆する．．．
勉強嫌いじゃないけど、飽きた。

二話 助手依頼

東さんとの出会い？から数年。私は普通に過ごしていた。もちろん、第ちゃんの家にも遊びに行ったりもしていた。その度東さんも出迎えてくれた。

そしてその時が来てしまった。

宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツ・・・

『インフィニット・ストラトス』・・・通称『IS』だ。

最初は注目されなかったけど、（東さんは学生だったため注目された）その後起きてしまった

『白騎士事件』で一躍注目されるようになった・・・兵器として。

しかもISは「女性にしか扱えない」から各国で女尊男卑が進んでしまった。

あれから数ヶ月、私はいつもどおり暮らしていたけれど・・・

「祐希いー。電話よー。」

一階から母さんの呼ぶ声がした。私は読みかけの本を置いて部屋から出た。

「誰から？」

「それがねえ、分からないのよ。ただ、『祐希ちゃんいますか』ってしか。」

誰だろう？と思った。私に電話をかけてくるのは篝ちゃんか一夏くんしかかけてこないから。

そう思いながら母さんから受話器を受け取った。

「もしもし？」

「．．．もしもし、ひねもす？」

．．．ああ、あの人しかいないと思った。電話をかけたらいつものセリフ、これは．．．

「東さん？」

「はあゝい。みんなのアイドルっ、篠ノ之東さんだよーっ!!」

このタイミングでっ!？まあいつか。取り敢えず．．．

「何か要件があるんですか？」

「うんうん、ありあり、超アリなんだよーっ!!取り敢えず家の前にいるから出てきて出てきてっ!!」

「はあーい。じゃ、今すぐ．．．」

「それとつ。今日は泊り込みで来てくれるかなあ？いいかなあ？」

ダメだ、これは「必ず泊まってね！」って言っているようにしか聞こえない。

「はあ、分かりました。少し待っててください。準備しますから。」

「うんうん、束さんは律儀な子は好きだよ？」

なぜ疑問形？と思いつつ受話器を置いた。

「母さん、友達の家泊まりに行ってもいい？」

泊まるなら申し出をする。これ小学生の鉄則。

「いいわよ。迷惑かけないようにね。」

すごいあっさりだ。こんなところがいいのかもしれない。

「分かった。行ってきます。」

私は準備をして、家をでた。すると目の前に束さん。

「きたきた、じゃあ行こっか！」

言われるまま私はついて行った。

数十分後、ある建物の前に到着。ここは・・・？

「ここはねー、私がISを開発した場所、『倉持技研』だよっ！」

ここがISを開発した場所かぁ・・・って私が来る場所じゃないよね。

「私がゆーちゃんを呼んだのは、私の助手になって欲しいからなのだっ！」

うん、よく聞こえなかった。

「・・・え？」

「だから、私の助手になってほしいのだっ！」

うわー、いきなりだよ、いきなり。

「なんで私なの？」

「頭がいいからだよ？」

疑問形返しは止めましょう。

「だってゆーちゃん、全国模試いもグフツ!？」

「言わなくてもいいでしょっ!?!?こんなところでっ!?!?」

「(・・・!コクコク)ぷはっ。ゆーちゃんひどいつ。ちーちゃん顔負けのアイアンクロー・・・!どこで習ったの?」

「千冬さん本人。」

こんなこともあるのかと私は習っておいていたっ！これから先も使おう、うん。

「取り敢えず入ろう、そうしよう！」

「はい．．．」

何か上手く乗せられたような気がするけど行こう。聞くことも沢山あるし、なぜ私なのかも聞こう。そう考えながら足を進めた。

二話 助手依頼（後書き）

今回は特に引用しなかったと思う。

次回はシートさんの作品で出てくるあの人が登場するかもしれない。
倉持技研^{II}でわかると思います。

三話 AI（前書き）

テスト一日目が終了。

気休めに投稿。

オリ機体のデータ収集集中なので感想などで意見を入れてくれると助かる。

今回はシートさんから一人登場します。

倉持技研〃この人です。

ではどうぞ。

三話 AI

取り敢えず倉持技研の中にある応接室に入って休憩中。私は束さんの真理を知るために聞いてみた。

「で、もう一度聞きたいのだけど、何故私なの？」

「もう、だから「頭がいいから」って言ったでしょ？全国模試一位のゆーちゃん？」

うわぁ、案の上の返答。

ちなみに一位は一位でも二位と50点差以上の差を付けての一位。これについて私の学校は順位を配らないなどの対策をしていたらしい。これは文部科学省の目にもつき、後日IQ検査をした。

結果、IQ180。小学生の頭脳じゃないっ・・・と私自身思った。とゆーか、なぜ束さんは・・・

「知ってるのかでしょ？私に知らないことはないのだよ・・・！」

この人は相手の考えることが分かるのだろうか。私も欲しいなあ、うん。

「まあー、それはおいといて。この束さんが作ったISは女性しか使えないのは分かるよね。いずれゆーちゃんも乗ってもらってから助手になってほしいとおもったからさあ。」

乗るのは確定ですか・・・でも、乗りたいとは思ってたけどね。

「それでねー、あといつくんを守って欲しいんだよねー。そのためにゆーちゃんに専用機を作るの。それでゆーちゃんも手伝ってもらんだ。特にAIやOS中心にねー。」

ん？なぜ一夏くん？

「それはっ、ゆーちゃんが仲がいいからだよっ」

二度目だ。心を読まないで欲しいなあ。でも専用機を作るのは嬉しいなあ、と思ったりする。

「それでゆーちゃんは協力してくれるかな？」

うーん、どうしようかなあ。

「はい、お茶を持ってきたわよ。ん？あなたは束ちゃんのお友達？」

ドアが開きお盆をもった白衣の女性が来た。その顔立ちはとても若く、一言言っなら『美人』。

「奈々さんありがとー。この子は私の親友だよっ！」

「久遠祐希です。おじゃましています。」

「あらあら、可愛い子ね、この子が祐希ちゃんね。私は水城奈々よ。奈々さんでいいわ。よろしくね。」

ここから、少し備考モード。

水城奈々——倉持技研最高責任者。倉持技研は奈々さんの夫が支援

している。（夫についてはシートさんの作品にて。今後出てくる可能性有り。）

年齢は40代と言っていたが、どう見ても20代にしか見えない美貌である。

ちなみに料理の腕は確かである。

―以上

「祐希ちゃん、そんなに焦らなくていいからゆっくり考えていいわよ。私も最初は驚いたのだから。」

言われたとおりだ。ゆっくり考えることにしよう。私は貰ったティ―カップを傾けながら頷いた。

それからそれから、あれこれと30分ほど色んなお話をした。

「さてとつ、ゆーちゃん、奈々さん、研究室に行こっか？ゆーちゃんはまだ答えられなくてもISみたいでしょっ！」

正直私はISを見たかった。さっきの話は拒否してもだから……

「見せてくれるなら見たいですっ！」

「よろしい。素直な子は束さんは大好きです！」

「あらあら、お姉さんぶっちゃって。可愛いわねっ」

奈々さんは微笑みながら言っていた。

「むう、奈々さん痛いところを．．．。」

さすがの束さんもお手上げみたい。

早速私たちは研究室に向かった。白い壁、白い床の廊下を歩いて到着つ！20秒。意外と広い。束さんはコンソールの前に立ち常人にはありえない速さで何か打っている。パスワードかな？と思っていると終わったらしい。

『パシユッ！！』

ドアが開き私たちは中に入って薄暗い中を中央にある「物体」に向かって歩いた。着いたとたん部屋の明かりが付いた。

灰色の機体が鎮座している。そのシルエットはまだ研究中！という雰囲気。私は思わず、

「IS．．．。」

とつぶやいた。束さん、奈々さんは私を見て微笑んでいる。どうも私の顔に興味津々．．．

「って、近いんですけどっ！」

「あっ、ごめんごめん。つい見とれちゃって。（てしまつて。）」

仲いいなあと思いつつ、聞いてみることにした。何を？決まっている。

「触っていい？」

二人は顔を見合わせ、「うん。」と少し考えていた。そして、束さんが

「これはちよつとね。ISはね国家機密でもあるから普通の人が勝手に触っちゃいけないんだあ。でもねでもねつ、この倉持技研の研究員、つまり私のお手伝いの件をOKしてくれたらだいじょうぶなんだよっ！」

やっぱりそうきた。でも私はこれを見た瞬間決めていた。

「うん、私は束さんのお手伝いをするっ！．．．でもお母さんとお父さんにも言わないと．．．。」

「そうよねえ。流石に小学生が決めてもいけないからね。じゃあ、一応仮契約の段階で進めましょうか。政府も祐希ちゃんのこと承諾してくれるだろうしね。両親には明日説明しましょうか。それでいい？祐希ちゃん。」

それは妥当だなあ。政府が承諾してくれても契約していなければ条約違反になっちゃうだろうし。

「分かりました。お願いします。」

「じゃあじゃあ、触っていいよっ！」

私は恐る恐る近づき．．．触る。

その瞬間あらゆる情報が流れてくる。

「コア・ネットワーク・・・接続未設定。ハイパーセンサー・・・構築中。P I C < パッシブ・イナードナル・キャンセラー > ... 構築中。シールドバリアー、及び絶対防御・・・構築中。ワンオフ・アビリティ < 単一使用能力 > ... 構築中。初期設定・・・未設定。拡張領域無しパススロットの為、後付装備イコライザ・・・未設定。e t c ...

・・・コア・ネットワークA I システム、「久遠祐希」による設定の為、未設定。e t c ...」

・・・何故A I システムは私が設定する事になっているのかなあ？
前々から考えていたのかなあ？

「ちなみにね、ゆーちゃん。この子のA I システムについてはゆーちゃんに設定してもらおうとI S を『開発したとき』からかんがえていたんだよっ！」

やっぱり・・・。

「なんでそんなときから？」

「面白そうだからさっ！」

きました根拠なし攻撃。私は落胆というダメージを・・・

「でもねでもねっ、全国模試はI S が発表される前でしょ？採点が終わった瞬間、私の全情報収集能力を行使してゆーちゃんのデータを得たんだ。そのとき私が決めたんだよ。」

受け流した。とゆーか束さんには尊敬しかない。どんな情報収集を

したんだろう？

「それでそれで、AIの開発してくれるかなあ？」

私は少し考えたが、言うまでもない。答えはこれしかない。

「．．．やります！私はISをもっと知りたい！」

「じゃあ、私とISの基礎から学びましょうか。わからなかったらなんでも聞いてね♪」

「はい、わかりました。」

「東さんは新しいISを作ろっ♪」

その日はIS漬けになったことは言うまでもない。

三話 AI（後書き）

シートさんの「verweile doch, du bist so schön」より水城奈々さんを引用しました。性格がいまいち再現しにくかった。駄作で申し訳ないです、シートさん。

本編にはあと2〜5話（大まかですみません）かかると思います。

前書きでも書きましたが、感想をお願い致します。

四話 最年少の研究者（前書き）

テストなんて知るものか。

適度にやればそれで良し。

それではどうぞ。

四話 最年少の研究者

倉持技研で泊まった次の日、私は一旦報告のために家に帰ることを決めた。束さんの助手、もとい倉持技研に所属することになるため、奈々さんが同行してくれることになった。

一方、残って開発するといった束さんは――

「ほいほいっと。そして次は――・・・。」

現在絶賛作業中。天才と言われるだけの技術力もある。空中投影パネルを3つ浮かべ並列作業をまるでマシンガンのようにこなしている。

「それにしても、ゆーちゃんは行動力があっていいね。それと昨日の学習力には驚くなあ。」

昨日は奈々さんとゆーちゃんですISの勉強をしていたのだ。私は新しいISの開発をしていたのだけど・・・

驚愕の2文字以外ありえなかった。ゆーちゃんは奈々さんが教えたこと全てをその場で理解していた。なんという学習能力、いや完璧な理解力だね、うん。

「そーいや、私がゆーちゃんを誘った理由はなんだったっけ？うん・・・あれだっ！」

時は全国模試終了後。当然その頃の私はゆーちゃんと親しかった。あの時に拾ったプリントを見てあそこまで理解するなら学力も高いはず！．．．そう思ってたがそれには^{ハッキングも}あらゆる手段を行使して情報をGET！！点数が異常だったけどそれは気にしない。予想の範囲内だね。IQも．．．予想通り。私並みだね。

しかし、このあと問題用紙の裏に書いてあった情報を見て驚いた。普通は問題用紙の裏なんてだれも記録しないのだが政府は学力に驚いて残してあったのだらう。（問題の解答途中を見るためだらう）

私と会った時のプリントの内容がそのままそっくり書いてあった。しかも改善法まで。その改善法は私の改善法とほぼ一緒だった。ゆーちゃんが何を考えたのかは分からないけどその上から鉛筆でなんども斜線が引かれていた．．．多分漏洩防止だらう。

．．．作りたい。ISをこの子と一緒に。ただそれだけ。この子に私の欲望を実現させるなどといったことはなく、「単純に」作りたい。どこまで極められるかを。

「これから作れるんだなあ」一緒に！そーいえば今頃どうなっているのかなあ？」

——久遠家

「それで、祐希はどうしたいのか」

わあ、同時発言。流石私の両親、仲睦まじい。この年になってもう

ブラブなのはどうかと．．．ん？年齢？父さんはよくても母さんは言々と怒られるなあ、うん。

それはさておき、奈々さんから昨日話し合った事情を説明してもらった。両親は動揺することなく、比較的にラックスして聞いている。途中感嘆の声を上げていたけど、それでいいのか両親よ。

「私は．．．なりたい。研究者に。私の手でISを作りたい．．．」

「「じゃあ、水城さんよろしくお願いします。」」

早っ。また息ピッタリ。どうなんだろうこの夫婦は。

「えーと．．．、本当にいいんですか？」

さすが奈々さん。重要だから念入りに確認してくれる。尊敬します。

「ええ、祐希がやりたいことを見つけたんです。それを助けてやらなくて親とは言いませんから。」

嬉しかった。私は世界で一番いい親を持っている。父さん、母さんのためにも頑張らなきゃ！奈々さんは両親の答えに対して

「分かりました。では正式に久遠祐希ちゃんを研究者として迎えます。それと給料についてですが．．．」

「ああ、それなら祐希の口座を作るのでそこをお願いします。」

「えっ、いいの父さん？」

そりゃそうだ、小学生にお金を渡すようなものだから。

「おう、祐希が頑張つて得るお金なんだ。研究にでも使えばいい。家族の分は父さんが働くから大丈夫、心配ない。」

嬉しいことに限らない。だから私は、

「分かった、ありがたく使います！」

「おう、頑張れよ祐希。それと水城さん、質問と意見があるので……」

「はい、なんでしょうか？」

「学校は今まで通り通えるんでしょうか？」

「はい、それについては政府に承諾してもらい、世間に研究者になったことを伝えないよう配慮してもらいます。」

「分かりました、それと本人の希望に応じて昨夜のように泊まらせてもらってもいいですか？夜中に帰宅させたくはないので。」

「はい、もちろん構いませんよ。あとほかの小学生のように普通の生活を遅らせるよう配慮します。」

「有難うございます。それでは祐希をお願いします。」

「分かりました。ではお邪魔いたします。」

こうして約1時間に渡る契約が終わった。それにしてもどちらにも泊まれるのは嬉しい。研究所が校区内でよかった。

「じゃあ、父さん、母さん、研究に行ってきます。」

「ああ、無理しないようにな。」

「迷惑をかけないようにね。それと、いつでも帰ってきてなさい。」

「うん、ありがとう！行ってきます！」

「「いつてらっしゃい。」」

そして倉持技研へ歩いた。空は昼間なのでとても明るく、雲ひとつなかった。

「いい親持ったわね、祐希ちゃん♪」

「はい！そして自慢できる両親です！」

「じゃあ、束ちゃん待ってるだろうから急ごっか！」

「はいつ！奈々さん！」

——研究室

「出来たああ！これがああ・・・ゆーちゃんの専用機の装甲だああ！」

研究室の真ん中に鎮座していたIS。まだデータ入力が終わって
なかったが装甲が完成していた。その配色は白主体の黄色のライン。
装甲はともシャープなラインで形成されていた。

まるで『天使』のように・・・。

四話 最年少の研究者（後書き）

長かった。勉強、本気でやらないと終わらない・・・！
頑張ろう。

次回はIS学園試験前まで飛びます。
感想よろしく願います。

五話 白董くシロスミレく（前書き）

テスト終了！

テストの詰めは見直しではなく機体構想を練っていました（笑）

ネーミングが難しいのなんの・・・誰か知恵を！

ではどうぞ。

五話 白董くシロスミレ>

——アタシが研究者になって数年の時が過ぎた。今の私は高校受験生。周りは日々勉強に取り組んでいたけれど、アタシは全くと言ってもいいほど勉強していない。

なぜか。

——『IS学園』を受験するからだ。

アタシは小学生の頃からISの研究をしていたものだからほかの受験者より豊富な知識、それと研究するたびに試運転もしていたため操縦技術も自然と付いてきた。もちろん、普通の教科も入学すれば勉強する。

でも、勉強する必要がない。小さい頃から理解力と記憶力、柔軟な発想力はずば抜けていたから教科書を軽く読み返すなどをすれば問題はない。

ということで私は自分自身に感謝しながらISの研究をしていた。現在10時。しかしアタシは度重なる徹夜ですぐにも寝てしまいそうだった。すると手元にあったケータイが軽快なリズムを奏でながら電話を受信したことを告げている。その液晶パネルには見慣れた人物の名があつた。

『篠ノ之 篤』

アタシは頑張つて腕を伸ばしボタンを押した。

「もすもす・・・？」

「もす？元氣無いな祐希。ちゃんと寝ているのか？」

「ん、寝てないよ。只今絶賛3日連続徹夜中」

「おいおい、大丈夫なのかそれで・・・？まあ、それはおいといて」

おいとくのっ！と心の中で突っ込むアタシ。

「それで祐希は何処を受験するんだ？」

「え、知らないの？」

「知らないぞ」

そりゃそうだ。教えてないんだもん。

「ん」と、IS学園」

「本当かつ？そうかそうか、よかったあ・・・」

「なんで？」

「知っている人がいると安心するからな」

「まあ、それもそーだねえ」

アタシも周りが知らない人ばっかだったら孤独で死んでしまいそう
だ。いや、兎じゃないけど。

第がIS学園に入学するのは当然だろうとも思っていた。なにせ「

実の姉がISの開発者』だからだ。

「でも、また篝ちゃんと生活できると思うとアタシはとても楽しみになってきましたよ？」

「私もだぞ祐希。しかしいつ受験なのだ？」

「明日だよ」

「ええっ！？ごめん、こんな時に掛けてしまって・・・」

「謝らなくていいよっ、むしろこんな時に掛けて欲しかったよ」

「え？」

「アタシは篝ちゃんとこーやってお話するのがとても楽しいから。それに篝ちゃんに会えるならこのくらいの試験どーってことはない！」

「このくらいの試験って・・・でもありがとう、祐希。じゃあ、またな。こんどは・・・」

「「IS学園でっ！！」」

「「・・・フフッ、じゃあまたね（な）」」

通話を終えたアタシはケータイを机に置き、ベットに身を投げ、仰向けになった。

「・・・でも、実際は合格したようなものだけだね」

実際のところ私は束さんから強制入学．．．ゴホツゴホツ、推薦をもらっていた。でも非公式なもんだから出向かなければならなかった。IS学園の試験にはISの試験稼働・教員との実践も含まれている。束さんはそこで私の専用機を渡すらしい．．．「ゆーちゃんにはいっくんと篝ちゃんを守ってもらわなきゃ！これはそのための剣だよっ！」のことだ。

あれ以来私はあの機体と会っていない。どうなっているのかとても楽しみだ。

——次の日アタシは試験会場にいた。しかし専用機を貰うので最後になると千冬さんから連絡があった。束さんが教えたのかな、きつと。そんな訳でアタシは施設を暇つぶしに回っていたのだけど．．．

ありえないことが起きた。ある待機室になぜか一夏くんがいる。しかもISが反応している。

「何やってるの？一夏くん？」

「祐希．．．動いてしまった．．．ISが」

この瞬間束さんが言った「いっくんを守ってね」の意味が全て分かった。

「はああああああ．．．」

——色んなこともあり最後のアタシの番になった。放送で指定された待機室に向かっている。

「ここかなあ？」

扉をひらくと二人の影が見え、その奥に『物体』がある。

「やっと来たか。祐希。」

「やあやあ、ゆーちゃん！久しいねえ。実際に会うのは何年ぶりかなあ？」

黒いスーツをピシッときめた黒髪の織斑千冬さんとうさみみ力チューシャをつけた篠ノ之束さんがいた。

「さっきは一夏がすまなかったな。．．．あとで罰を与えよう。」

「．．．ほどほどにしてくださいよ？」

「わかっているさ、冗談だ」

全然冗談に聞こえないのは何故だろう？

「ふっふっふ．．．ついに完成したよ！ゆーちゃん専用ISS！その名は．．．^{シロスマレ}白堊！」

束さんが言った瞬間、後ろの『物体』にライトが当たった。

「白董・・・」

アタシは思わず呟いた。その機体の美しさに・・・

五話 白董くシロスミレく（後書き）

祐希は和利夫さんのツバメさんを引用しています。唯一の違いは転生者でなく、中身も女の子のところからです。

次回は白董の戦闘描写を書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679y/>

IS fusion

2011年11月30日22時49分発行